

先日、ご両親と共に木の花を訪れ、いさどんの面談を受けた高校1年生のきーちゃん。半年前から過食とうつ状態になり、4月からは学校に行けなくなりました。面談の中でいさどんから「きーちゃんの問題は家族の関係から来ていますね」と指摘されたきーちゃんは、「じゃあ、いさどん、私たちの家族会議に参加して下さい！」と提案。そこで、いさどんとようこが木の花創立以来初の相談出張のため、きーちゃんファミリーを訪れました。

いさどん：

今日は、初めて出張して相談に乗るという日です。今までは富士宮の家で皆さんをお迎えして、相談に乗っていました。「今日は記念すべき第1歩だね」と車の中でも、ようこちゃんと話しながら来ました。

さて、きーちゃん、木の花から戻ってからその後の気分はどうですか？

きーちゃん：

前より楽しい。

いさどん：

それは良かった。先日の面談では、夕方4時頃起きると言っていたけれど、今日は何時に起きたの？

きーちゃん：

10時くらい。木の花から帰ってきてからは寝るのも12時くらいになって、パパよりも早く寝るようになった。

いさどん：

それは、木の花に行ってから変わってきたということかな？良い効果が出てきたね。

きーちゃん：

木の花に行ったおかげで、少しずつでも変わってきているよ。

いさどん：

気持ちが変わると、行動も変わるんだよね。

今日の僕は、皆さんの家族会議にオブザーバーとして参加ということですから、この家族会議のファシリテーターをまず決めましょう。

ゆうちゃん：

ファシリテーターって何？

いさどん：

ファシリテーターは議長ではありません。全体の中の平等な一人のメンバーであり、進行役のこと。議長ではないから自分も発言します。会議をどういうふうに進めていくのかを理解していて、全体を目的の方向に向けて進めていく役割です。

お父さん：

りっちゃんは朝起きるのが早いし、いいんじゃない？（一同、笑）

いさどん：

ファシリテーターは早起きする人がやるべきだ(笑)！誰かと考えると、長女のゆうちゃんか次女のりっちゃんがいいと思うのだけれどどうですか？

ゆうちゃん：

では、私がやります！

いさどん：

こういう家族会議は以前もしたことがあるの？

ゆうちゃん：

一回皆で集まったこともあったよ。3、4人とか、子供だけで集まって話したことはあるよね。

では、まずはきーちゃんから話そうか。「家族のストレスが原因で沢山食べるようになった」ときーちゃんは言っていたけれど、コンビニで買う量もだんだん少なくなってきたよね。4袋くらい買っていたのが、今は1袋くらいになった。

きーちゃん：

この前木の花に行ってから、そんなに買ってないよ。

ゆうちゃん：

今のストレス度合いはどんな感じ？

きーちゃん：

今はあんまりない。でも、ママが時々怖い。パパもガンガン言ってくるから怖い。

いさどん：

お母さんやお父さんにも、そのあたりはしっかりと弁明してもらわないと（笑）。きーちゃんには被害妄想的なところがあると思うけれどどうですか？

きーちゃん：

そうやって聞かれるとわからないから、言いたい時に言っていいたい？

ゆうちゃん：

この前、お父さんとお母さんときーちゃんが木の花でいさどんと話してから、家族の様子が変わってきたと思わない？「皆でコミュニケーションを取ろう！」という前向きな気持ちが出てきた気がする。

きーちゃん：

ママと私はあまりコミュニケーションを取っていないよね。ちょっと、トイレに行ってくる。

（ここで、きーちゃんが席を離れます。）

お母さん：

私はきーちゃんと距離を置いていますね。

ゆうちゃん：

木の花から帰る車の中で、ママは、「きーちゃんといるとイライラする」って初めて口に出したんだよね。

お母さん：

去年の12月、きーちゃんの具合が悪くなって入院し、その後退院してからは何をすることも私が必要だったじゃない？24時間ずっと。当時はきーちゃんも生きているのがやっとだったから、お風呂に入るのも一人じゃ出来なかったし。そのうち、リハビリを兼ねて私と一緒におつかいに行くようになり、歩くことから始めて。でも、一人では歩けなかったから、私が寄り添って歩くという生活がずっと続いたよね。

そうやって、きーちゃんがだんだん元気になってきて、30kg 台だった体重が少しずつ増えてきた。きーちゃんの中では、食べることによって元気になるということを確認し、お医者様も「苦しいのは体重が少ないからですよ」と言うから、彼女が食べるのをずっと見守ってきた。きーちゃんがどれだけ食べようと、「食べないと苦しい」「食べないと次の日起きられない」「食べないと力が湧いてこない」と言うものだから、「食べるしか

ないのかな」と思っていた。

そうやって体重が増えていったことに対して、「良かったね」と思いつつ、きーちゃんが中学校に戻ることは難しかった。でも、そういったふらふらの中で高校受験をし、合格して、自分の居場所を作ることが出来たんだよね。

でも、どこか無理して高校に入ったようなところがあったから、クラスの中で疎外感があり、元気な子たちについていけず難しい感じがあった。きーちゃんが苦しんでいるのを医者さんや学校のカウンセラーの先生、担任の先生と相談した結果、学校を無理して行かず休むことになって。

きーちゃんの寂しい想いは、私が英語教室の仕事をしていた小さな頃からあったのだなと思う。きーちゃんが必要な時に私がいなかった寂しさが、今のきーちゃんの状態を引き起こした原因なのかなと思っている。きーちゃんの中に満たされなかった想いがあるから、仕事で忙しかった私ではなく、ゆうちゃんや学校の友達が気に入るようなことをしてきた。でも、それでも埋め合わされず、今回の疎外感につながっていると思うと、元の原因は小さな頃の寂しさかなと思う。仕事をしている時は、子供たちよりも生徒さんを優先していたので、子供たちは辛かったのかなと思う。

ゆうちゃん：

私は辛くなかったけれど。今は、ママがきーちゃんにイライラするという話だったよね？

お母さん：

そうやってきーちゃんを見守ってきたのだけれど、今、きーちゃんがある程度元気になり、自分の想いで外に出て行って自分勝手なことをするのがイライラするのだと思う。それはきーちゃんからしたら必要なことかもしれないけれど、私からすると、「私は辛いからこうなの」と、きーちゃんの状態なら何でも許されると思っていることについて、私がイライラするのだと思う。逃げ道をちゃんと作っておいて、それでいざとなったら、「痛い」とか「苦しい」と訴えてくるところがある。

ゆうちゃん：

演技もすごく上手いから（笑）。

お母さん：

本当にアカデミー賞並み（笑）。口も上手だし。

いさどん：

そうやって、まわりを自分の思うように動かし、自分の都合の良い世界を創っていく。

お母さん：

だから、きーちゃんとはちょっと距離を置いた方が、私が冷静でいられるかなと感じています。

いさどん：

今、皆は本当に正直な話をしているのだと思います。この家族会議は、きーちゃんワールドを皆で創っていきこうという場所ではなく、皆が調和的に暮らしていくためにどうしたらいいのか？という場所ですからね。

誰もが自分の存在で家族に影響を与えて、今の家族の状態があります。影響の内容によっては、見直さないといけないところは見直していくことが必要です。この物語の主役であるきーちゃんは、当然、見直さないといけないところがあるわけですから、皆が今まで表現出来なかった本当の部分を出すのが大切だと思います。ひょっとして、今まで腫れものに触るようにきーちゃんに接していたのかもしれませんがね。ちょうど今、きーちゃんがないのが良いチャンスですから、ここで正直なところを出しましょう！（一同、笑）。

お父さんは、きーちゃんの攻撃の対象になっていたのですから、「実は」という話があるんじゃないですか？

お父さん：

そうですね。きーちゃんの問題は、学校が原因ではなく家の問題から始まったのだ、と本人は言っています。私が仕事に行き、お母さんが夜 9 時頃まで仕事をしている中で、夕食も家族バラバラで食べています。そういう意味では、きーちゃんに寂しさもあったと思うのですが、私は男なので女の子の気持ちがなかなかわからないところがありますね。

きーちゃんは、色々なことを私に言ってきました。「お父さんのやること全てがいけない」と言ってきたこともありましたね。ただ、私から見ると、きーちゃんは自分をコントロール出来るはずなのに、自分が嫌なことから逃げようとしている、ということもあります。

ゆうちゃん：

きーちゃんのどこまでが本音かわからない。

お父さん：

きーちゃんは敏感な子だから、寂しさはすごく感じていたと思います。そのあたりを第三者から「それは家族の問題であり、夫婦の問題です」と言われると、「そういうところもあるのかな」と思います。

いさどん：

僕が第三者の立場で捉えると、きーちゃんには元々アンバランスなところがあります。今、お母さんやお父さんが話していたことは、彼女の中にあるアンバランスの部分の一つです。ストレートに物事を表現せず、カモフラージュというか演技とも言えるのですが、まわりを自分の思うような世界にしていこうとする傾向があります。それは全体にとって良い傾向とは言えませんね。今は家族の中で許されていても、学校や社会の中でそういった姿勢をしていると、まわりからヒンシュクを買ったり、場合によってはいじめの対象になったりします。

しかし、それは彼女だけの問題かと言うと、そういったことを彼女が表現する環境があったということです。だから、これは誰が原因をつくって誰かがそこで被害に遭ったということではなく、皆でそういう場所をつくっていた、そこにきーちゃんが表現をしやすい環境が用意されていた、ということだと思っています。

今の話は、彼女の今の状態を判断するのにわかりやすいことです。そこで安易に、「きーちゃん一人の問題だ」というところになってしまうと、物事の全体像を捉えることが出来なくなります。

ちょうど、きーちゃんがここにいませんよね。もし彼女がここにいると、彼女は結構弱そうに見えて強いから、彼女流が出てきてしまい、皆が正直な心を出すことが難しい場所になるんだろうと思います。そうすると、今ここにきーちゃんがないのは神様の配慮だと思います。今のうちに、お父さんもお母さんもゆうちゃんもりっちゃんも、心の中を出しておいて、きーちゃんが戻ってきてから彼女の意見も聞いたらいいいと思います。だから、どんどん出しましょう（笑）。

ようこ：

「正直に出す」ことが今日の鍵ですから。それがなければ始まらない。

お母さん：

「ゆうちゃんは柔らかい性格だから話しやすい」ときーちゃんは言うよね。

ゆうちゃん：

きーちゃんは私を待っている生活だけれど、基本的に私は帰ってくるのが遅いし。私のために色々な種類のお菓子が入っているお皿を用意して、私が帰ってくると、「あるよ♪」と言って。「えっ、こんなに食べられない！」と思うくらい用意してくれたりするんだよね。

お母さん：

自分が必要なものをゆうちゃんに投影して、「これ、いいんだよ！」と言う。

ゆうちゃん：

その執着は怖い。ちょっとぞっとするような。「これから私のものは用意しないで」とずっと言ってきているから、今は大分減ってきたけれど。

お母さん：

だんだんわかってきた、というよりは諦めてきたのかな。「ゆうちゃんを待っていても仕方がないのかな？」と言うようになったし。

ゆうちゃん：

今までは電話やメールで、「今日、何時に帰ってくる？」と聞いてきたけれど、木の花から帰ってきてからは、「私はこれから、ゆうちゃんのことを待たない」と宣言された。この前きーちゃんが木の花に行ってから、色々なことが改善されてきているよね。

お母さん：

きーちゃんは何か対象が欲しいんだよね。例えば、私が忙しければ、友達やゆうちゃんに過度なおせっかいは焼いたり。相手が気に入ると思ったら、とことんその人のために演出する。

ゆうちゃん：

それも、ただ単に「買って来た」と言うと、「買わなくていいよ」と言われちゃうから、「当たった」とか「もらった」とかちょっと変えて言うんだよね。そのへんがすごく上手いよね。

いさどん：

そのアプローチはちょっと濃いよね。でも、濃く演出出来るだけの能力があるということも言えるよね。

りっちゃん：

それが本当かどうかもわからない（一同、頷く）。

（ここで、きーちゃんが部屋に戻ってきました。）

お母さん：

きーちゃんの原因の芽は私にあり、それがどんどん育っていったと思うんですね。私が自分の育ってきた環境を振り返ってみると、私の両親は自営だったので家にはいたのですが、両親が働いている姿をずっと見てきました。それが私が形成されてきた世界で、私も同じことを自分の子供たちにしていた。子供の頃、「今、お母さんがいてくれたら助かったな」と自分も思っていたから、きーちゃんの寂しい気持ちは理解出来る。本当は私もお母さんに、「そばにいてほしかった」と言いたかったけれど、言えなかった。そのことに今回のことで気がつきました。

きーちゃん：

今思うと笑っちゃうけど、パパが私の物をぱっと取っても、パパに言っても仕方がないから、私に「我慢しなさい」と皆が言ったり。自分が小さかった時は、それが辛かった。

いさどん：

「パパが取った」ということに対して、「パパが取ってくれた」という見方もあるよね（笑）。

きーちゃん：

パパはそう言うんだよね。「きーちゃんが太らないように取った」って。でも、自分が最後に食べようと取っておいたものを横から取られるのは嫌だ。子供だからとパパが私をからかって、私が物に当たったりギャーギャー言っても、皆はパパを止めてくれないし、それも私には辛かった。

いさどん：

それは「自分の気持ちをわかってほしい」ときーちゃんなりには傷ついているのだけれど、それを皆は「そうばかりではないんだよ」ということを言いたいのかな。

ゆうちゃん：

「二人とも、またやっているよ」と思っていた（お母さんとりっちゃんも頷く）。

きーちゃん：

そこで一言、パパに注意してほしかった。人の物を盗むなんて（一同、苦笑）。

いさどん：

でも、きーちゃんは「人の物を取ったパパと取られた私」と表現するけれど、「またやっているよ」と他の三人が思っているということは、「二人に対してどっちもどっち」という見解なんでしょ？

ゆうちゃん：

きーちゃんからパパへの言葉の暴力もひどかったし、パパがきーちゃんに物を投げたりすることもあったし。きーちゃんに対しては、「そこまで言わなくていいんじゃない？」と思ったし、パパには「そこまでしなくていいんじゃない？」と思っていた。「両方やっているから、両成敗でいい」と思っていました。

きーちゃん：

でも、私は精神的に辛かった。

いさどん：

この間の面談の時に、きーちゃんは自分の側から主張することもあったけれど、すごく客観的な眼もあったよね。

きーちゃん：

今からすると、昔の自分のことは笑っちゃう。

いさどん：

そうすると、今被害者的に話している部分を改めていくとバランスが良くなっていくよね。これからは、物事をバランス良く観られるきーちゃんの眼を育てていくことが大切です。自分のやっていることだって、「今から考えると笑っちゃう」と言っているのだから。

きーちゃん：

今は自分が被害者だと思わないもん。

いさどん：

その割には、お父さんに対してはきついよね（笑）。

きーちゃん：

去年退院してからママのおつかいに私がついていった時も、ママが「ほしいのなら、はっきりして！」と言ってきたりしたよね。それもちょっとショックだった。ちょっと被害者的に今話しているけど（一同、笑）。

ゆうちゃん：

きーちゃんが入院した時に、今までママのストレスがほとんどきーちゃんに行っていたけれど、それが一回私に来た時があった。

りっちゃん：

今でも時々、何が理由でイライラしているのかわからないけれど、突然ママがそういう雰囲気になるよね。

きーちゃん：

でも、ママはりっちゃんに八つ当たりをしない。

ゆうちゃん：

きーちゃんが一番多くて、次が私。りっちゃんは怒られるネタがあまりないから。

りっちゃん：

それは、ゆうちゃんが怒られているのを昔から見てきたからだよ（笑）。

いさどん：

賢く日々を過ごすコツをマスターしたんだ！

きーちゃん：

ママは、私のことをすごく心配してくれたよね。でも、ちょっと私の体調が良くなってくると、食べているだけで「あなたは食べているだけでいいね」とか、「何もしなくていいね」と言ってきたり。仕事も大変だからママがそう言うのはわかるけれど、辛かった。ゆうちゃんはゆうちゃんであるし、りっちゃんはりっちゃんであることがあって、私だけがぼつんと一人取り残されて。これは自分が被害者的に話したらね。

ようこ：

被害者的に話さないとうなるの？（一同、笑）

いさどん：

それは良い質問だ！

きーちゃん：

ママも大変だから私ばかりに構っている暇はないし、お姉ちゃんたちもやることもある

から強制出来ないし、仕方がない。

いさどん：

つまり、バランスの良い心は持っているのだけれど、一方の被害者の心を表現して、もう一つの心は自分の中に閉まっておいたというところかな？大分、きーちゃんの心の構造が観えてきたね。きーちゃんは器用な人だから、二つの心を持っているのに、被害者の、攻撃的の心を表現してきたということだよ。ちょっと病的にきーちゃんが表現しているということは、自分でわかっていた？

きーちゃん：

うん。それはわかっていた。「ああ、また言っちゃった」って。

ゆうちゃん：

きーちゃんは、いつも言った後に悲しんでいるでしょ？

お母さん：

ちょっとしたら、「ごめんね」って、しおらしく近づいてくるものね。

きーちゃん：

今はパパが「学校に行かなくてもいいんだよ。気にしなくてもいいんだよ」と言っているくせに、私のことを思ってくれているのはわかるけれど、「学校へ行け」ということを言われている気がして、すごくプレッシャーになっている。私のためを考えると、早く学校へ戻った方が行きやすいというのはわかるけれど。

お父さん：

きーちゃんは嫌なことがすぐ逃げるところがあるから、時間が経てば経つほど行けなくなっちゃうのかなというのはよくわかるからね。

いさどん：

お父さんは、きーちゃんの攻撃の対象になっているのですが、先程きーちゃんは「お母さんに対して被害者の的に表現している」と言いましたよね。そうすると、お父さんに対しても同じように、きーちゃんはお父さんを理解しながら、責める側の心を表現してきたということなのかな？

きーちゃん

お父さんに責められるから、私も責めて。

いさどん：

「お父さんに責められている」と言うけれど、お父さんの立場を理解すれば、お父さんはきーちゃんにとって悪いことばかりを言っているわけではないよね。

きーちゃん：

それはわかっているけど、お父さんは自分が一番責めてしまう人。

いさどん：

お父さんからすると、きーちゃんを感情的に許せないと思っている部分もあるのか、それとも、きーちゃんが健全であってほしいという心の方が強くて、そういうことを言っているんですか。

お父さん：

それはもちろん後者ですよ。

きーちゃん：

昔からパパに笑われている感じがする。パパの方が力が強いから手を押さえられたり、リモコンでぶたれたり。私を追いかけている真似をして、私がキャーキャー言っているのを見て笑ったり。

いさどん：

それは、きーちゃんにとってはストレスが溜まることだけれども、お父さんは違う意味で「何とかしよう、何かを伝えよう、良くしよう」とした結果が、表現としてそうなったということですよ。

お父さん：

そこには原因があるわけですよ。パパはゆうちゃんやりっちゃんにはそういうことをしないでしょ。きーちゃんの中にその原因があるわけだよ。例えば、きーちゃんが太っていた時にポテトチップスばかり食べていたから、「一人占めして食べなくてもいいよね」って言っただけで。

きーちゃん：

私も食い地が張っていたけれど、パパも食い地が張っていたよ。私のものを取っていたじゃん。

ゆうちゃん：

パパも食い地が張っているの？

お父さん：

別にきーちゃんのものを取っていないよ（笑）。皆はそのことについてどう思う？

りっちゃん：

きーちゃんの中に「自分のものだ」と所有する心があるから、人にあげたくなかったんだよね。

ゆうちゃん：

子供の頃は「これは自分のもの」という気持ちもあったけれど、ある程度大きくなったら、「ちょうだい」と言われたら「いいよ」とあげれば良いと思う。私もきーちゃんに「あげれば良いじゃん」と言うよね。

きーちゃん：

最近はそうしているよ。でもそれと、小さな頃から取られていた時の気持ちは違うんだよね。上手く言えないけれど。

いさどん：

きーちゃんの言っていることはわかる。でも、違う解釈も出来ることはわかっているよね。

きーちゃん：

今はわかる。その時はわからなかったけれど。

いさどん：

でも、「今はわかる」と言いながらも、被害的な意識も強く残っているよね。そこは今後どうしたらいいかな？今のような心をこれからも持ち続けていくのであれば、対立的な場所は常にここにあり続けるわけだから。

きーちゃん：

私に所有権はないのだから、心優しくあげれば良いと思う。でも、パパも自分が勝手に取ったりと悪いことをしたら、素直に謝れば良いと思う。

いさどん：

そういうふうに、「不愉快だ、被害を受けた」という感情が根強く残る傾向が自分にある、ということはわかる？

きーちゃん：

うん。色々な面から見れば色々な考え方があるし。

いさどん：

それはこれから大切だよ。被害的な感情が根強く残ってしまうと、そうでないことすら被害のように思ってしまうことになってしまっていて、どんどんそれが進むと。。

きーちゃん：

(いさどんの言葉を途中で遮って) パパも私もそういう傾向が強いよね。

ゆうちゃん：

パパも強いのか？

きーちゃん：

強いじゃん。私が何か言うと、「それは違うよ」って。

ゆうちゃん：

それはまた別の話じゃない？

お父さん：

お父さんは根に持たないよ (笑)。

いさどん：

きーちゃんが強く自分の主張をするように、お父さんにもお父さんの主張をさせてあげ、皆がそれを聞く環境は必要じゃない？ きーちゃんは自分自身を表現しているけれど、きーちゃんにはお父さんの自己表現を認めないという心がない？

きーちゃん：

パパは、「パパはいいよ、パパは全部理解しているからいいんだよ」と言って話さない。話すのが怖いから。

いさどん：

お父さんは、ストレスが自分がないから話さないのか、遠慮して話さないのかどちらですか？

お父さん：

遠慮しているわけではないんですよ。例えば、どういう時に僕が話さないときーちゃん

んは思う？

きーちゃん：

ママに対しても私に対しても誰にでも。「パパはいいよ、理解しているから」って。

ゆうちゃん：

そうだね。ママに対して言いたいことがあっても、その場にママがいなければ話すけれど、ママがいたら話さない。

きーちゃん：

あと、私を使って話すことも多いよ。

ゆうちゃん：

そうだね（笑）。「そういうふういきーちゃんが言っていたよ」とパパがママに言ったりね。

お父さん：

そうだね（笑）。ケンカになるからね。

いさどん：

ケンカになるというのは、ケンカになるのを避けるということですか？

お父さん：

そういうところがあります。この前木の花に行ってから、子供たちが小さかった頃、親に対してどう思っていたのかを聞いたんですね。例えば、母親にイライラをぶつけられても、ゆうちゃんは右から左に聞き流していたりとか。

ゆうちゃん：

それは、自分にストレスが溜まらないようにしていたの（笑）。それに対して、いちいち私がストレスを溜めるのが嫌だったから。

いさどん：

上手な受け流し術みたいなものだよ。

ゆうちゃん：

そういう処世術をつくって対応していたの。

いさどん：

賢いじゃない (笑)。それは、具合が悪くならないコツだよ。

ゆうちゃん：

いちいち具合が悪くなっていたら嫌だからね。

いさどん：

お父さんに対して僕がさっき聞いたかったことは、お母さんに対しても子供たちに対しても、本音を言わないということですか？

お父さん：

お母さんに言うとケンカになるから言わない方がいい、と思っていたのはありますね。

きーちゃん：

私は逆に、沢山話してほしかった。「何で話さないんだろう？」と小さい頃から思っていた。お友達の家泊まりに行ったり、テレビに出てくる夫婦を見ると、沢山話したりケンカしているのに、うちは何もなくて。

いさどん：

それがストレスになり、お母さんはきーちゃんや他の子供たちに対してイライラをぶつけたかもしれないし、お父さんはきーちゃんとの変則コミュニケーションでストレスを発散していたということかな？

きーちゃん：

パパとママが「そんなこと気にしない」と言っているくせに、その二人の口調がすごく恐かった。

いさどん：

「気にしない！」と言って、気にしている人は多くいるね (笑)。

きーちゃん：

あと、ステーキの件もあったよね。

ゆうちゃん：

私たちが小学生の時のクリスマスの話ね。

いさどん：

結構前の話だ。ステーキ事件！サスペンスですね（笑）。

ゆうちゃん：

クリスマスにはごちそうを食べるということで、ステーキを食べるのね。その日はパパだけ帰ってくるのが遅くて、パパが帰ってきてからママがパパのステーキを焼いてくれて、「あ、いい感じ！」と私たちは思っていたんだよね（笑）。

きーちゃん：

そうそう、嬉しくて。それで、ママがステーキをテーブルへ運ぶ途中で、洗面所の方へ行こうとしたパパとぶつかったの！それで、ステーキが床にべちゃっと落ちちゃって。そこで最悪な雰囲気になって、二人は何も言わず、ママはそのステーキはもう食べられないからと捨てちゃった。ゆうちゃんとりっちゃんはママの方へ行って、私はパパの方へ行って。そこでパパは、「何だ、ぶつかったなんて知らないよ。いいよ、食べるから」と言う。私はちょっといらっとしたけれど、二人がママの方へ行ったから、私はパパの方にいたんだよね。

いさどん：

子供たちが二人の調整に入ったということだね（笑）。

きーちゃん：

その後パパは、「何だ、捨てちゃったのか」と言って、二人がすごく険悪なムードで、恐くて。

ゆうちゃん：

「やっちゃった！」という感じだったよね（笑）。どっちかが悪いわけでもないんだから。

きーちゃん：

昔から、誰かがどっちかに行ったら、私はもう片方の方へ行ってケアしなきゃみたいなの（一同、笑）。

いさどん：

さっきお父さんが、「ケンカになるから本当のことを言わない」と話をしましたよね。そんな時木の花では、対立しないように事実を情報提供しています。相手から受けたものを情報として正しく伝達しています。そうしないと相手に事実が伝わりませんし、それを置いておくと次にそれが残っていて、ささいなことであっても、前の分を足して問題が大きく表われてくることになり、より険悪な材料を将来に残すことになるのです。

前のツケがあって、ちょっとしたことで問題が大きくなる。だから、ケンカになるからやめておこう。そこでやめるから、また次に足され、また何かがあった時に、ケンカになるからやめておこうと溜めながら来たということだと思います。

僕らは沢山の人と一緒に暮らしています。沢山いるのなら、なおさらこのような場合に収集がつかなくなります。だから、常に本当のことを言い合います。不愉快を相手に伝えるというよりも情報を伝えるという作業をすると、「そうだったのか」とお互いに理解することが出来ます。そこでは感情を荒げないことが、皆で平和に暮らしていくコツです。

きーちゃん：

「誰誰が言っていたよ」と言うのではなくて、自分がそれを言いたいのなら、自分の意見として言えばいいと思う。

いさどん：

情報として正直に伝えていくことが必要だと思います。お父さんが自分の中の本当の感情を伝えないというのは、二人が出会った時からそうだったわけではありませんよね。いつからそうなったんですか？お母さんも、同じようにぶつかるから伝えないようになったのか、それとも、お母さんが伝えてきたからこそ、お父さんはそれをぶつかる解釈して話さなくなったのか。なぜそうなったのか、ということが理解されず来てしまったのだと思います。そういう関係の中で子供たちが育ってきて今がある、ということでしょう。

お父さんに聞きますが、いつ頃からそういうことが始まったのですか？

お父さん：

いつ頃でしょうね。。。

ゆうちゃん：

昔は、旅行に行って皆で遊んだり、二人の間に会話があったりして、私たちはすごく嬉しかったよね。

いさどん：

そうすると、子供たちはいつもパパとママが御機嫌でいてくれるように配慮しながら育ってきた、というところもあるのかな？さっきのステーキ事件のように、二人が険悪なムードになると、暗黙のうちに二人はこっちへ、一人はこっちへと仲を取り持つような

行動を本能的にやっているということだよ。

子供たち：
そうだね。

いさどん：
これは別の解釈をすると、子供たちは親の関係に対して、腫れものに触るようになってい
つも気を遣って育ててきた。重症にはならなかったかもしれないけれど、それがきーち
ゃんの状態に出てきたということだと思います。

きーちゃんの問題から行き着くところは、お父さんとお母さんの関係になってきました。
二人の間の何かが解消されると、今回の家族会議の目的が達成されることになると思
います。今後、この家族に気持ち良い風が吹くかどうかは、ゆうちゃんが19歳で、きー
ちゃんが15歳ということを考えても、全く手遅れではありません。子供たちがもっと
大きくなって社会に出て、この家と距離を置いたあたりで「うちにあんな家だったよね」
ということではなく、これからまだこの家族で生活していくうちにこれが出たというこ
とは、本当に良かったことなのかなと思います。

お母さんが何かイライラを持っていて、子供たちに八つ当たりのような形で出てくると
いうのは、先程の子供たちの発言からもわかるのですが、その発信源がどこにあるのか
を今振り返ってみるとどうですか？

お母さん：
夫との関係ですね。

いさどん：
それは、具体的に言うとどういうことですか？そういうことを今まで誰かに話したこ
とがありますか？

お母さん：
家族の中では話さないですね。

いさどん：
今まで話したことがあるとしたら、どこで話しましたか？

お母さん：
友達です。

いさどん：

そこではどんな話をしましたか？

お母さん：

ずいぶん昔、わからなくなったこともあって。

いさどん：

昔とは 300 年くらい前ですか（笑）。

お母さん：

子供が生まれる前です。

いさどん：

じゃあ、子供たちはもう 300 歳くらいになっている（一同、笑）。

お母さん：

夫の家族に入り私が感じたのは、「私とはすごく違う考え方があるんだ」ということです。今までの自分の考え方ややってきたことがすごく否定されたような気がして、すごく息苦しいというか、生きにくく感じました。例えば、夫の家族の色に染まってしまえば生きやすいのでしょうけれど、当時は自分も未熟だったので、向こうの家族に言われることにぐさぐさ傷ついて受け止めていました。でも、夫は私とともに助け合いながらやってくれると思ってきたのだけれど、そうでもないのかなと感じて。。

いさどん：

わかりやすく言うと、結婚は二人三脚という人生を歩むことですが、夫婦の間に共通性が持てなかったということですよ。

お母さん：

結婚してアメリカに渡るということでしたが、ビザが下りず、日本で暮らすことになり、夫は就職し、私もしばらくして仕事をするようになりました。夫はサラリーマンとして家を支えながら、「妻と仕事を両立出来るのであればいいよ」ということで、私も仕事を始めました。

夫は、「自分が家を支えているのだから、～しても許される」とか、「誰のおかげで食べていけると思っているのか」というスタンスだったので、実際にそうであったとしても、そういう関係では納得出来ない心もありました。

いさどん：

夫婦二人がお互いに支え合う中で家庭がある、ということを書いたかった。

お母さん：

そうですね。そうありたかったのですが、夫は「自分が中心で、それに従えばいい」という感じでした。

いさどん：

子供たち3人が、「お母さんはストレスを自分たちに向けてきた」と言うけれど、お母さんに今のような背景があったということを知ると、お母さんに対する印象は変わる？

ゆうちゃん：

そういう話は大体知っているよね。時々そういう話が出るから。

きーちゃん：

それでもストレスの向け方は変わらないし、お互い変われば楽だし、いいんだろうけれど、話し合うことを提案しても話さないし。

いさどん：

対象に対して会話が出来ていない時、いくら友達と話をしてもその時はすっきりするかもしれないけれど、事は何も変わっていないから解決にはならないものです。子供たち3人に話しても同じことだよ。

きーちゃん：

お母さん自身が変えようとしているのかも、よくわからない。

いさどん：

というような景色が観えてきましたが、こういうことはお父さんと二人で話し合ったことはあるんですか？

お母さん：

ないですね。

いさどん：

それを聞いてみて、お父さんから「実は自分はこうだったんだ」というような話がありますか？

お父さん：

ずっとこういう感じで来ていて、「お母さんは、そういうことを考えているのだろう」と想像していたので、「やっぱりそうだったんだ」という感じです。「もう、この夫婦の関係を変える意志はないのかな」と思っていました。

いさどん：

何か伝えないといけない、対話しないといけない時に、お母さんの中に蓄積されたものがあるから、感じのいい受け答えが出来なかった。そうすると、お父さんとしては「争うのが嫌だから言うのをやめておこう」となっていたということではないですか？

お父さん：

そうですね。

いさどん：

そうやって溜まっていくから、イライラスパイラルがそこでは渦巻いて、子供たちは腫れものに触るように御機嫌取りスパイラルに入っていくという（笑）。だから、何でも言い合える環境をこの家につくっていくことが大切ですね。

ゆうちゃん：

私は長年二人の関係を見ていて、「この話題は触れてはいけないことなんだ」ということに気づき、ずっと触れてこなかったから、今胃が痛い。

りっちゃん：

1年くらい前に私が、「家族会議をしたい」とゆうちゃんに言ったら、「それはもう少し大人になってからじゃない？」と言われたことがある。この話はグレーゾーンというか。

いさどん：

胃が痛くなることはないと思うのだけれど、どう？そこが一番重要な話だよ。

お母さん：

今までアンタッチャブルだったことだから（笑）。

いさどん：

僕という第三者の眼から見ると、お父さんはお父さんなりにここを平和にしようと思ひ、「これを言うと波風が立つかな」と思って言わずにやってきた。でも、それはお父さん流だったんだよね。誰でもそうだけれど、自分流だけでやっている相手は無視するこ

とになる。

お母さんはお母さんで、育ってきた環境で生まれたお母さん流があり、結婚してそれを表現しながら家庭を築いていこうと考えていたと思います。実際には別の価値観があり、なんだか自分を無視されたような気になったのだらうと思います。

人はそういったところで安定した状態を保ち続けることは難しいから、誰かに相談したり、イライラをぶつけることもあったのでしょう。お父さんは、それを無視していたわけではなく、どこかでそれを感じてはいたのだけれど、そこに触れてしまうと何か大きな改革が必要になり、それには痛みも伴うかもしれないから、なるべくそれを避けていこうと思っていたのでしょう。そうして、「ぶつかるから本当のことを言わない」ということになったのだと思います。

りっちゃんとゆうちゃんもそれを感じながら、「いつかそれを話せるといいね」と言っていたのも、そのところだと思います。その場所が今日ここにあります。誰も悪気があってやっているわけではない。良い家庭にしようと思ってやってきた。しかし、それぞれが「自分の場所から観た良い場所」ということだったのは確かだと思います。

きーちゃんは、二つの心を持って使い分けていることがわかりましたよね。自分の側から被害者的に主張する部分と、客観的に自分を観る部分の両方があるのに、表現するのは自分の側から被害者的に相手に主張するところでした。

きーちゃん：
子供みたい（笑）。

いさどん：
これからは大人だから（笑）。そのように、自分の側だけから観ると、相手に対して配慮が欠けることになります。皆が元々善意でやっているのであれば、今日のような場所を設けて、自分の善意と相手の善意を知り合うことが大切です。

でも本当は、こういう会議を開かなくても、日頃から本当のことを情報提供として伝えていけば、「自分はこう思っていたけれど、相手はこう感じていたんだ」とお互いをよく理解することが出来ます。自分側の意見と相手側の意見が上手にかみ合い、そこで初めて気持ちの良い音楽を奏でることが出来るのだと思います。

きーちゃん：
今日いさどんが来てくれて皆がまとまったよね。いつもは私が「家族会議をしたい」と

言っても、ママがイライラしてどこかに行ってしまったたり。それに、最後にまとめてくれる人が今まではいなかった。他人がいると、誰も立たないし（一同、笑）。

いさどん：

僕を他人にしないで（笑）。ここの家族のつもりで話しているのだから。ここがこれから良い風を吹かしてくれるのは、それは僕のためにも嬉しいことだよ。

今までこういった場が出来なかったということは、相手の言っていることを情報としてもらい、自分の思っていることを伝えるだけで、自分の思うことを相手に理解してもらおうということを優先している人がそこに沢山いると、そういった場所になります。

きーちゃん：

りっちゃんとそういう話をしたことがあったね。

いさどん：

それはものの捉え方や会話の手法みたいなものです。お父さんとお母さんが出会ってから年数は経ちましたが、これからも二人の関係は続くわけですから、これからは表現方法を変えてお互いを理解していくことが大切だと思います。

この間木の花に来て、いさどん効果なのか、木の花効果なのか、家族の雰囲気が変わったということですね。そして、僕とようこちゃんがここへ来て新しい風を入れました。それは、僕らが新しい風を入れたのではなく、ここに新しい風が吹く時が来たと思うのです。今までも、そういう考えを持っていたら出来たことですが、そういう考えがなかったから出来なかっただけのことで、誰でも起こせる風なんです。だから、その手法を取り入れ、皆が気持ち良く暮らせるために使えば、良い風が吹くようになるものです。

皆が「良い家族にしたい」と思い表現したものの、その表現の仕方がちょっとまずかったということだと思いののですが、どうでしょうか？お父さんは嬉しそうな顔をしてらっしゃいますが。最初にこの家族をつくったのはお父さんとお母さんです。二人の中に新しい気持ちが湧いてきたのかも聞いてみたいと思います。

お父さん：

はい、新しい気持ちでやっていきたいと思います。

いさどん：

そうすると、切り替える気持ちがあるということですね。

お父さん：

はい。今まで、皆がお母さんの態度を気にしながら生活しているようなところがあって、お母さんがイライラしてその場の雰囲気が悪くなっても、私はそこに触れたくないという感じがありました。でも、こちらには雰囲気を悪くしたいという気持ちは全然ありません。そのあたりはお互いに変わらないといけないのかなと思っています。

いさどん：

今のお父さんの話は、「悪意はなかった。雰囲気を悪くする気持ちはない」ということでしたが、では、悪意がなかったから問題はなかった、ということでもないと思います。そこに配慮が足りなかったところはなかったですか？

お父さん：

お母さんが夜9時まで仕事をしているので、夕食も皆バラバラで取るんです。うちではよく「セルフサービス」と言うのですが、私が使ったお皿を洗わないと、ゆうちゃんが洗ってくれたりするんですよ。私とお母さんの間を波立たせたくないからだと思うのですが。お母さんとしては「お父さんが洗わないといけない」と思っているようですが、ゆうちゃんはそれを感じ、二人の雰囲気が悪くなるのが嫌だから、自分が進んでやっているのだと感じます。

いさどん：

ゆうちゃんからすると、それは全体に対する配慮だよ。ただ、その配慮をしてしまうと、本来波立つ種があるのにそれが出ないから、ずっとあり続けるという状態になる。臭くないようにとりあえず蓋をしておこう、ということにもなります。

ゆうちゃんが気を遣うのは悪いことではないと思うのだけれど、一時は嫌でも波立たせて噴出させてしまい、きれいにするという方法もある。ただ、何が原因かということがわかってしまえば、これからはそういう行動は必要ないよね。腐らせるまで置いておかず、新鮮なうちに処理していくことが大切だね。

ゆうちゃんは、長女として、子供の立場として、随分気を遣ってきたね。御苦労さまでした（一同、笑）！

ゆうちゃん：

「自分がやらない方がいいのかな」と思ったこともあったけれど、そうするとお母さんはイライラするし。大改革をする準備がまだ出来ていないのかなと思って。。

いさどん：

今回は大改革にしたいよね。そうすると、きーちゃんが大改革のためのきっかけをこういった形でつくってくれた。きーちゃんにまだ問題はあと思うけれど、大きな役割をしてくれた。

こういったことが起きないように、お父さんがこれから一番気をつけたらいいと思うことがありますが、それは何だと思えますか？

お父さん：
話すことですか？

いさどん：
そうですね。常に正直に自分の気持ちを伝えていくということです。相手と同じではなくても、お互いが正直に伝え合ったら、違っていても理解し合うことが出来ると思います。「そちらはそういう事情があったんだね。私にはこういう事情があった。その間を取って、こういうふうにしていこう」という共通性を持つことが出来れば、お母さんのイライラも消えると思います。お母さんとしても、一方的に自分の都合ばかりを叶えたいわけではありませんから、「共通性を持っていきたい」という話が先程出てきたと思うんですね。それを、これから大いにやってもらったらいいと思えますが、どうですか？

お父さん：
努力します！

ゆうちゃん：
本当に（笑）？！私は19歳だから、もう20年越したよ。今まで20年滞っていたものに取り組むのだから、相当の覚悟が必要ですけど（笑）。

いさどん：
ここで一言伝えたいのは、例えば60歳になった人たちがこういう会話をしている場合もある。70歳になってからしている人たちもいる。そういう人たちからしたら、20年というのは、「早くて良かったね」ということになります。「今気づいて良かったね」ということからしたら、今日ここには沢山の証人がいますので（笑）、それが出来ないとなると今度は裁判になるかもしれない（一同、笑）。

お母さん、相手が自分と通じていなかったということはよく理解出来ますが、だからといってお母さんが、それに対してその足りない部分を埋め合わせる努力をしてきたのかと云ったら、そうばかりではありませんし、相手も悪意で接してきたわけではありません。

お母さん：

悪意ではないのですが、お父さんは自分が表に立たず、子供でも親でも誰かを通して私に伝えてきます。自分の声で自分を語らないんですね。だから、常に私は他の人から話を聞くんです。

「別れて下さい」とか、「今こういうことをやっています」ということをいつもまわりから聞くんです！（テーブルを拳でどん！と叩きます。）「これって何なんだろう？」と、子供が生まれる前から思っていました。

いさどん：

今の話を聞くと、お父さんが考えている以上にお母さんは傷ついているということですよ。二人の関係が子供たちにこういう結果をもたらしているということからすると、今後真剣に取り組んでいくことが大切だと思います。

お母さんは今、強くそのことを言われ、それは20年の間に積み重なってきたことですが、それを水に流すことは出来ませんか？それから、今までのことはこれからのためのプロセスとしてあったことだと、善意に捉えることは出来ますか？

お母さん：

私が一人の人間として生きていく時に、今まであったことはあったこととして、私は生きていきたいです。

いさどん：

今、一人と言われましたが、それは「一人の人間として」と同時に、夫もいれば子供たちもいる生活ですけど、家族も含めてということですか？

お母さん：

そのあたりがよくわかりません。

いさどん：

わかりませんか。そのくらい、傷が大きかったということですか？

お母さん：

そうですね。今とても辛いから。結婚してからずっと晴れなかった心を、ずっと話し合ってきた、ずっと方向性を見出せなかった、それをなあなあにしてきた。「世の中はこうだから」とか、「親はこうだから」と、その本質以外のところで片付けようと

してきたけれど、私はその本質のところまで語りたかった。

いさどん：

それはわかりやすく言うと、世の中や親ということではなく、夫婦の関係のところまで語るということですか？

お母さん：

そうですね。例えば、一人の人間対人間で、何かがあった時に話し合っていければ良かったんですけど。色々な諸事情が出てきて、まだ自分が幼く、その時点では上手く対処が出来なかった。例えば、夫の実家の人たちに対して一緒に生きていく時に、そこに夫が入ってくれて上手くやってくれたら、私はこれほど辛い気持ちにならなかったと思います。これは、私の側からの意見ですが。私はいつも悩んでいました。「何が違うのかな、何でかな」といつも考えてきました。本当だったら、私と夫が声を荒げたとしても、とことん話し合っていた方が良かったのだと思います。

でも、ではなぜその時に私は離婚をしなかったのだろうか。当時は子供もまだ生まれていなかったから、今と比べたら容易に離婚出来たはずなのに。そうやって、なあなあでここまで来て、子供たちを授かり、忙しさの中に入って行って、「私はどこで自分を表現していくのかな」と思った時に、自分の強い想いが子供たちにも向いただろうし、仕事にも向いたのではないかと。夫婦の関係はずっと置いてけぼりで、蓋をしてずっと生きてきました。

いさどん：

結果として、きーちゃんがそれを開けてくれた。今の話を聞いていて、子供が生まれる前の夫婦二人だけの時になぜ別れなかったのかは、理由があったのだろうけれど、今ここまで来たことが真実です。そうすると、今は二人だけではなく、子供たちもいるわけです。この三人がこの世界に存在するために二人は別れなかったのであるし、それが一番大きなことだと思います。

お母さん：

実は、私もそう思います。

いさどん：

そうしたら、起きたことを起きたこととして評価するのか否定するのかと考えたら、ここに行き着くために今までのことがあったと判断した時に、ここまで来てやっと求めるものがわかったから、夫婦関係を解消して自分の道を歩む、という選択も世の中にはあります。夫婦の縁を切って、それを選択するか。

今までの20年間出来なかったことが、ここで出来るチャンスが来ています。その大事な時に、夫婦関係を解消するためにこの場所を使うのだろうかと思います。僕は今まで出来なかったからこそ、これからの家族のあり方を見つけるために、この場所を活かしたいと思います。

それは100:0ではないと思いますが、こういうことがあって、そこから学び、夫婦関係をやり直そうとする気持ちが強いのか。それとも、新しい道を歩む気持ちが強いのですか？そこを決断しないと、次のことを皆で語り合えないと思います。

お母さん：

なぜここまでやってこれたのかというと、三人の子供たちを世の中に送ったことが一つの大きな意味だと思っています。子供たちには仲良く幸せになってほしいと思っています。では夫婦は？と聞かれたら、私は正直よくわからないんです。

ゆうちゃん：

前からさ、「子供たちが巣立ったら私も巣立つわ」と言っていたよね。

いさどん：

僕は誰の側にもつかない立場でここに参加しています。お母さんが「今はよくわからない」と言っていることを、他の四人はよく理解してあげることが大切なのかなと思います。ただ、お母さんの決断をわからないままにしておく、皆でこの家をこれからどうしていこうという話にはなりません。

今日この場所で結論を出すのか、それとも今日結論は出せないこととして持ち越すのか。そのことに対して皆はどう思いますか？

お父さん：

「お母さんはずっとそういうふう感じてきたんだろう」と思います。僕としてはもう一度やり直したいと思っていますが、後はお母さん自身の決断だと思っています。

いさどん：

本当は、今までにそのことを伝えることが大切だったと思いますよ。

お父さん：

申し訳なかったと思っていますし、よくわかっていなかったということもあります。こういった話を聞いたのが初めてのことなので、ここまでお母さんが感じていたのだと思

っています。そういう中で、もう一度やり直すことは出来ないのかなと思っています。

ゆうちゃん：

二人の関係が戻るということを半分あきらめていたから、戻る気持ちがお父さんにあるということを今初めて知って。。。私は、多分戻らないだろうなと思っていたから。

いさどん：

ゆうちゃんはそういう表現をして、歓迎なのかそうでないのか、複雑な気持ちなのかな？

ゆうちゃん：

仲良くなってくれと嬉しい。

いさどん：

じゃあ歓迎なんだ。

ゆうちゃん：

仲が悪いのが普通だったから、仲が良いというのがよくわからない。

いさどん：

すごく希望的なことじゃない？今までに見られなかった景色が今後ありそうなんだよ。

りっちゃん：

私はすごく楽しみ！皆が正直に話せるようになればいいと思う。

いさどん：

りっちゃんには、新しい家族像が見えてくることは歓迎ということだね。では、主役のきーちゃんはどう？

きーちゃん：

私も楽しみ。

いさどん：

そうしたら、病気も治っちゃうかな(笑)？さて、一番デリケートで傷ついていたのは、きーちゃんではなく、実はお母さんだっと思っていますが、お母さんは今、皆の意見を聞いてどうですか？

お母さん：

(涙声になりながら。。。) 皆が大切な人なんです。本当に大切な人たちがここにいて、私がここにいるというのは、本当にありがたいと思っています。皆がいるから私がここにいられる。だから、新しい関係をつくっていきたいと思います。今までのようではなく、本当に新しい関係だったらやっていけるのではないかと思います。

いさどん：

そういうふうに捉えると、今までのことは新しいことを生み出すための出来事と言えますよね。もし、始めから自分の思うようになっていたとしたら、それぞれが自分を振り返って学ぶという機会がなかったことにもなります。そこにはトラブルはなかったかもしれないけれど、色々なことがあって人は学んでより高い理想を築いていくものです。このことは皆にとってすごく大切なことだったと思います。ちょっと痛みはあったかもしれないけれど、痛みがあるのは自分が改めるべき姿勢があったからこそ、それが与えられたのだと思えば、良いことになってしまいます。

そこから次へのチャンスを見ないで別の道を歩んでしまったら、それは辛い出来事を与えられて、辛だけの思い出になってしまうと思います。そうではなく、その延長に新しい世界を見たら、実はそれは辛いのではなく、その先にある喜びを知るために与えられた、とてもありがたいことだと解釈出来ます。そして、その学びのために僕らは生きているのだと思います。

先程、20年お父さんとお母さんのこういう関係があったという話がありましたが、きーちゃんがそれをきーちゃん流に表現してこの機会をつくってくれたんだから、きーちゃん、御苦勞様でした！でも、自分に問題まで与えて役割を果たすのは、ここまでは大切な役割であったかもしれないけれど、もうその役割は要らないよということだから、これからは不健康に生きるのではなく健康に生きていこう。

ということで、お父さんとお母さんの関係が新たなところに向かうということになれば、全体のことは解決していくし、新しい世界が生まれてきます。それにもう一つ、今回の一番のテーマであったきーちゃん的生活や健康を取り戻すことについても、自動的に解決されていくのかなと思います。これは、とても良い結論になってきました。

さっき、きーちゃんがいなかった時に、「きーちゃんがいなくて、皆で思い切りきーちゃんについて言おうよ」と(笑)。「きーちゃんは結構怖いから、皆に何て攻撃してくるかわからないから、今のうちに話しておこう」と沢山話しました(笑)。

きーちゃんは自分を主張するところと、客観的に自分を観ている両方の心がありながら、

それを寂しいとか、病的に表現してきたところがあったけれど、これからはそこを自分でしっかりと改められるのかな？いつかきーちゃんも新しい家族をつくる時が来た時に、今の心の体質のままですと、そこでまた問題が発生するよね。今まで辛いことはあったかもしれないけれど、そのことに気づき、勉強をしてこれから健全になっていく道を歩んでもらいたいと思います。

きーちゃん：

しっかりとやってみる。

いさどん：

きーちゃんの中にしっかりと改める心が出来れば、今日の話はこれで解決だと思うのですが、皆これでどうですか？きーちゃんも大事な役割を果たしてきましたが、表現がストレートではなく、「ちょっと演技っぽいよね」と言われていたけれど、そのあたりもきーちゃんは気づいている？

きーちゃん：

うん。

いさどん：

確信犯だったんだ（一同、笑）！お父さんとお母さんから発したことだったけれど、それがこれから解決していくのだから、これからはそういう役割をしなくてもいいよね。そうすると、きーちゃんはこれから自分が健全になっていくための振り返りをして、学校に戻っていくということでもいいかな？

きーちゃん：

はい。

いさどん：

だそうです、皆さん（笑）。時々、皆のことを報告してね。お父さん、お膳立てをするようで、最初はぎこちなくて気持ち悪いかもかもしれませんが、後でお母さんに話しかけたらいいと思います。そこからスタートです。照れくさいと思われるかもしれませんが。そういうふうにした時に、二人の間の氷が溶けるのだと思います。

僕には人間関係の相性を観るという特技があるんですよ。大体夫婦というものは、8割、9割相性が悪いものなんです（笑）。なぜかと言うと、夫婦は学びの対象だからです。ということは、相性の良い夫婦には問題が起きません。そうすると、一人一人の人間としては問題があるのに、相性が良いために問題が発生しないのです。お互いに「それで

いいんだよね」と言って、自分たちをかえりみなくなってしまう。

そうすると、相性が良いことが良いわけではありません。問題事が起きるからこそ、私たちは自分の姿勢を振り返り、改めること出来ます。問題事が起きないから改めないでいったら、社会に問題事をばらまいているようなものです。問題事があるからこそ、人は新たな道を歩むことをします。それには、いつも正直でいることです。

「相手を自分の思うようにしたい」と考える前に、相手のことを先に理解すれば、相手も自分のことを理解してくれます。そうすると、どんな人とも良い関係を築くことが出来ます。

きーちゃん：

いさどん、今日はどうもありがとうございました（一同、笑）！来てくれて嬉しかった。

いさどん：

僕も来たかいがあったよ。きーちゃん、おめでとう！

きーちゃん：

すっきりした！便秘がなくなった感じ（一同、笑）。

ゆうちゃん：

私も胸のキリキリがなくなった！さっきは、「やばい！どうしよう！」って、ずっと胸がキリキリしていたけれど。

いさどん：

いよいよ、山が来たかと思った（笑）？でも、山は越えないと向こうの景色が見えないからね。いつかは超えるものだよ。

お母さん：

今飲むお茶は本当においしいですね（一同、笑）。

ようこ：

お母さんに笑顔が戻ったのが、今日の一番のポイントだったのかな。

いさどん：

これから詰めていって下さい（笑）。余韻はあると思いますが、詰めていき、次の景色を見て、そこでまた振り返っていけば大丈夫です。ゆうちゃん、りっちゃん、きーちゃん

んも、まわりにいるのだからそこを後押ししてあげてね。

ようこ：

この三人がこれからどう育っていくのか、楽しみな魂だね。

いさどん：

年齢のように育ってきたというよりも、奥に秘められている気配りや人の事を想うことを学んできているよね。観えているところよりもはるかに大きなものが育っていると思います。特にユニークで「将来、どうなっていくのだろうか？」と見ていきたいのはきーちゃんだよ（一同、笑）。

きーちゃん：

この前木の花に行った時に、「いさどんの跡継ぎになれるよ」と言われて純粹に嬉しかった！

いさどん：

もう決まっているから（笑）。跡継ぎを決めたからには、伝授しないといけないと思っているからね。

きーちゃん：

いさどんの跡継ぎと言われて、こっちに帰ってきてから3日くらい凶に乗っていた。

いさどん：

はっはっは（笑）。自分でちゃんと診断しているんだ。それは大変良い傾向だね。

今日は、横浜にいる家族のもとに来たような気がします。この家族は、ここにいる一人一人が奏でる音楽のようなものですから、それを楽しみにして前向きな心を持てば、その心にふさわしい世界が生まれます。今日、僕とようこちゃんがここに来て、そのお手伝いが出来たことを嬉しく思います。

お母さん：

すごい展開になりましたよね（笑）。きーちゃんの問題から夫婦の話になって、私のことになって。

いさどん：

神様は面白いことをされるなと思います。問題事がなかったら、ここまで深く話し合うこともなかったですよ。だから、問題事を恐れることはありません。問題事に会っ

たら、「この顛末はどこへ行くのだろう？」と楽しみにするくらいの意識でいると、いつも良いところに収まる事が出来ます。

では、僕らはそろそろ帰りますね。また、会いましょう！

みんな：

どうもありがとうございました！！

以上